春日井市（愛知県）

まちと自然がちょうどいい！文武両道の多彩なまちづくり

文武両道のまち・春日井

全国の都市には「○○のまち」というような、それぞれのまちの特色を表すキャッチフレーズがある。主に全国発信をする際に使われる。

例えば、今回訪ねた愛知県春日井市には、主要なキャッチフレーズだけでも「書のまち」「サボテンのまち」「剣道のまち」と3つある。注目されるのは、これら3つのキャッチフレーズがいずれも歴史を持ち、具体的な根拠に裏付けられていることだ。

このうち「サボテンのまち」については、春日井市が実生サボテンの生産量日本一を誇っていることから生まれたキャッチフレーズだ。春日井商工会議所を中心に、行政と事業者の協働による「春日井サボテンプロジェクト」を展開中で、昭和34年の伊勢湾台風の襲来以後、生産が本格化した歴史を持つサボテンを活用した各種関連商品開発、サボテン料理の普及、イベントの開催（4月のサボテンフェアなど）などを通じ、春日井市の特産品・ブランド品としてのサボテンを発信している。

「書のまち春日井」については、春日井市に古くから伝承される「小野道風の生誕地説」が根拠になっている。ご承知のように小野道風は、平安時代の三跡とされる書の達人だ。史実として春日井＝生誕地説を裏付ける決定的根拠はない。だが200年以上前から、春日井が生誕地として語り継がれている事実があることは、古文書などで分かっている。

さまざまな形で「書」という文化活動を大切にする地域性がはぐくまれ、人づくり・地域づくりの重要なメソッドとして、「書のまち」としての環境が構築（血肉化）されてきた歴史がある。中でも市制施行（昭和18年）以前の昭和11年から続く「県下児童・生徒席上揮毫（きごう）大会」は、「書のまち春日井」の面目躍如たる書道大会といえる。

「戦時中にも途切れず、80回を数えるこの大会は、最も緊張が強いられる席上揮毫、つまりその場でお手本もなしに、課題に合わせた書を書いて競う大会です。毎年10月下旬に、愛知県内の小中学校の各学年2名の代表選手が集い、参加します」

そう語る伊藤太・春日井市長も、「私は小中学生のころ、揮毫大会の代表選手にはなれませんでしたが、小野道風の伝説を先生

伊藤（いとう）　太（ふとし）
春日井市長

から教えていただき、生誕地とされるまちに生まれ育っているのだという誇りを胸に、『書』の授業には真剣に取り組んだものでした」と述懐する。

さらに席上揮毫大会に出品された作品は、戦前の分も含めすべての優秀作品が保存され、日本の初等教育における「書道教育」の事績の流れを示す、際立った資料の一つとして伝えられている。

また市内には、小野道風の偉業を顕彰し、作品や関連文書、書道に関する膨大な資料などを収蔵し、さまざまな書に関する展覧会などの事業を実施する研究展示施設「春日井市道風記念館」（昭和56年竣工）があるほか、昭和24年から始まった、伝統ある全国公募の書道展「道風展」も広く知られる。

同時に春日井市では、子どもたちに「書」に親しんでもらうよう、小学校全学年で「書の時間」が実施されている。これは、平成23年度から従来の書写の授業（年間30時間）を「書道科」（年間35時間）として拡充化し、先進的に市内小学校2校から始め、平成28年度からは市内小学校37校全校で実施している。

「書のまち春日井」にふさわしく、人間教育としての書をより幅広く学び、身につける試みである。「書のまち春日井」は全国区での知名度の高さだけでなく、まさに質実の伴ったまちづくり、人づくりを目指す事業なのだ。

一方で春日井市には、平成4年から始まった「全国高等学校剣道選抜大会」（春日井市で毎年3月に開催。全都道府県の男女各代表校、計96校が参加）と、平成21年から春日井市に会場が固定された「全日本女子学生剣道優勝大会」（毎年11月開催。全国から代表校が参加する女子大学生の団体日本一決定戦。大会自体は昭和57年開始）が開催されている。しかも市内生徒たちの心身の健やかな成長に資するべく、市立中学校15校のすべてが、体育の授業として剣道を正課にしているなど、「剣道のまち」としての顔を併せ持っている。

「書のまち」「剣道のまち」が同時進行する、まさに文武両道のまちづくりが、春日井市では実施されているのだ。

ピンと空気の張りつめた「県下児童・生徒席上揮毫大会」

剣道のまち春日井は若い剣士の憧れ（全国高等学校剣道選抜大会）

高蔵寺リ・ニュータウン計画の目指すもの

自身も剣道教士7段の称号を持つ伊藤市長は、「剣道には三美三強という教えがある」と語る。三美とは「着装・立ち居振る舞い・打つ姿」のことで、「目に見えるしぐさや表情、（胴着の）着こなし、立ち居振る舞いの美しさはそのまま、体幹の強さや体の運び、意思の強さなどの表れでもある」（伊藤市長）という意味だ。多感な精神性の芽生えとともに、体が急速に出来上がっていく中学生時代に、剣道を体験する効用は、そういう意味合いから

生産量日本一の実生サボテンは春日井市のシンボル

も、決して小さくない。

「三美三強」の教えは、伊藤市長が平成18年に就任以来、市職員に常に求めてきた意識改革、市民のニーズを的確にとらえ、適切な方法で実現に向け努力する、仕事への真摯な取り組み姿勢とも通底する。

「民間企業では常識だったQCD(品質向上・適切なコスト・納期厳守)の意識づけを、適切な市民ニーズを常に把握する努力の重要性とともに、職員に徹底したのです」(伊藤市長)

行政の側のQCDへの意識づけは、「真の意味での市民協働」の在り方を、市民に理解してもらう際の必要条件ともいえる。現代の市政運営に不可欠な、官民の足りない部分を相互補完しようとする市民協働体制の構築は、市民と行政の双方に、約束を果たそうとする相互努力の姿勢がなければ、成立し得ない在り方の事業だからだ。

そういう意味合いからも注目されるのが、平成28年3月、徹底した市民協働で策定された「高蔵寺リ・ニュータウン計画」である。

ご承知のように現在、高度経済成長期に建設されたニュータウン、巨大団地の老朽化と高齢化への対策が、全国各地で大きな問題になっている。春日井市の高蔵寺ニュータウンは、旧日本住宅公団(現UR都市機構)が主体となり、建設された大規模団地で、日本初のニュータウン「千里ニュータウン」(大阪)に遅れること6年、日本で2番目の大規模ニュータウンとして、昭和43年に入居が開始された。

名古屋市に隣接する春日井市は、中京圏でも高度経済成長期の人口の伸びが急だった地域だ。高蔵寺ニュータウンの入居が始まった昭和43年に14万人台だった春日井市の人口は、昭和50年に21万人台、昭和55年に24万人台へ急増した。その後の伸びは鈍化するも、平成17年に30万人台、平成26年に31万人台に達し、現在もわずかながら増加し続けている。そのような中、高蔵寺ニュータウンの人口は、戸建てと集合住宅を合わせ、最盛期に入居者数約5万2000人を誇った。高齢化や人口減少が進みつつあるとはいえ、現在も約4万5000人の居住者数を保つ高蔵寺ニュータウンを形成する地域は、人口面において春日井市の中核を成してきた。今もそれは変わらない。

「入居開始からもうすぐ50年が経過しようとしています。初期に20代で入居した人は70代、30代だった人は80代、歳月の経過を考えれば高齢化するのも当然なのです。しかし、ニュータウン計画初期に建設され、大阪の千里ニュータウン、東京の多摩ニュータウンと

毎年10月開催の春日井まつりの主役は小野道風と「書」

ともに日本三大ニュータウンとされる高蔵寺ニュータウンは、規模の大きさだけでなく、広大でゆとりのある区画構成や緑の多さなど、とにかく素晴らしい環境が備わっています。春日井市としては、この高蔵寺ニュータウンが持続可能なまちであり続けるために、建物はもとより各種設備のリノベーションを適切に行い、高齢者が生き生きと暮らせて、住民の皆さんの世代交代も無理なく進むような施策を進めていきたいと考えております。『高蔵寺リ・ニュータウン計画』は、そのための基礎的な計画なのです」（伊藤市長）

その計画の具体的な事業の第一歩として、ニュータウン内の藤山台地区に設置されていた3つの小学校（藤山台小学校、藤山台東小学校、西藤山台小学校）を1校（藤山台小学校）に統合することを平成25年4月から段階的に行い、平成28年4月には新・藤山台小学校が新校舎の竣工とともに開校した。

また「高蔵寺リ・ニュータウン計画」を策定するに当たっては、平成19年にまず「高蔵寺ニュータウン活性化施策検討会」（春日井市、愛知県、UR都市機構、高蔵寺ニュータウンセンター開発株式会社）を設置。住民参加の活発なニュータウンミーティングを経て、子育て支援拠点「東部子育てセンター」、市民団体の活動拠点「東部ほっとステーション」を開設し、ニュータウンのガイドブック「まちなび」を発行するなど、周到に準備を進めた。

毎月第3土曜に開催される弘法市（勝川大弘法通り）と大弘法様（崇彦寺）

ベッドタウンからライフタウンへ

住民との話し合いを重ねるだけでなく、計画策定のプロセスにおいて、子育て支援拠点とともに市民団体活動拠点の「場」を設置した事実は、高蔵寺リ・ニュータウン計画の基本的な姿勢を物語っているといえる。現在暮らしている人々による地域活動の活性化と、これから増やしていきたい子育て世代へのケアが、同時に図られていることを意味するからだ。同様の趣旨から、前述の新・藤山台小学校内には、学校支援ボランティアや地域活動に貢献する人々のための活動拠点「学校地域連携室」が設置されている。

そのほか、「高蔵寺リ・ニュータウン計画」に伴う事業が本格化するのはこれからだが、策定のプロセスで、住民参加型のインフラ修繕活動や、官民の連携による空き家流通促進プロジェクトなども既に始まっている。さらなる取り組みの深化が注目されるところだ。

こうした地域の成熟化に伴うまちづくりの

老朽化・高齢化の進む高蔵寺ニュータウンでリ・ニュータウン計画がスタート

高蔵寺ニュータウン内の子育て支援拠点「東部子育てセンター」

移動販売事業（移動スーパーマーケット道風くん）

在り方について、伊藤市長は2期目のマニフェストで、「これからの春日井市は、従来のベッドタウンではなく、ライフタウンを目指していきたい」との表現で言及している。

かつてベッドタウン化の進捗によって人口が急速に増えた時代は、地域に「夜だけ寝に帰る住民」が急速に増えた時代でもあった。しかし少子高齢化が進みつつある現在、ニュータウンに限らず、市内の各地域で定年世代が急速に増えている。

「そうした世代にとって、自宅のあるまちはベッドタウンでなく生活のためのまち、すなわち必然的にライフタウンと化していかざるを得ないんです。高齢化とはそういう意味で、地域の課題をわがことと認識し、協働でことに当たろうとする意識を持つ世代の住民が、地域に増えていくということでもあるわけです」（伊藤市長）

春日井市ではそうした観点から、市民協働の輪を精力的に広げている。例えば、地域住民が主体となって行うまちづくり活動を支援する「街づくり支援制度」、犯罪や災害に強い都市基盤整備の調査・研究を市民協働で行う「春日井市安全なまちづくり協議会」の活動、日常の買い物に不便を感じている方の多い地域に生鮮食料品をはじめとする生活必需品を届ける「移動販売事業（愛称＝移動スーパーマーケット道風くん）」などだ。また、製造業離れが進む若い世代の雇用確保の観点からは、若者向けの製造業イメージアップ作戦「ゲンバ男子プロジェクト」（ウェブサイト等を通じ、製造業の現場で働く若者の生き生きとした姿を発信する事業）も面白い。

春日井市道風記念館は全国的に珍しい書道専門美術館

「守破離」で目指す新たなステージ

地域の成熟化に伴う、こうした「ベッドタウンからライフタウンへ」の動きを促進する有力な事業の一つとして、今回強い印象を受けたのが、この地域で市民の生命を守る「春日井市民病院」と、それと隣接して市民の健康を支える「総合保健医療センター」

だった。春日井市民病院は地域の基幹病院として、特に高度急性期医療の充実化が図られているのが特徴といえる。そして、平成27年12月に市民病院の念願であった救命救急センターの開設で施設面での完成を見る。総合保健医療センターは各種健診や人間ドック、日常的な健康づくりの相談窓口としての機能を持ち、さらに地元医師会等の協力を得て休日・平日夜間急病診療所としての機能を合わせ持つ。3次救急までをこなす市民病院と市民の健康を総合的に守る総合保健医療センターが棟続きで一体にあるのは、市民にとって心強いだろう。

春日井市内で最も機能的かつ現代的な市街地を形成するJR勝川駅周辺での、地元商業者の出資によるまちづくり会社「勝川商業開発株式会社」が実施した各種事業（若手起業家を対象とする起業シェア店舗TANEYAの開設、子育て世代へのアピールに特化した商業施設・ままま勝川の建設）も、既に新たなにぎわいを生み出しており、ライフタウン春日井の顔の一つになりつつあることが実感された。

そして施設という意味で、市民病院・総合保健医療センターと同様に忘れてならないのが、取材直前の10月末に完成したばかりのJR春日井駅（橋上駅）と、駅の南北を結ぶ自由通路である。昭和2年に鳥居松駅として完成して以来、駅の南北交通が分断されていたため、橋上駅舎と自由通路は積年の願いだった。

9月のハニワ制作大会で作ったハニワは10月のハニワまつりで焼成され、八田川沿いのふれあい緑道に展示

自由通路には大型モニターを備えた公共掲示板があり、駅舎1階には観光・イベント情報などを提供する情報発信センター「リリック」もある。また全体的に、ユニバーサルデザインの手法に基づいた、障がいを持つ人や高齢者にもやさしい造りが、隅々にまで意識された使い勝手の良さが特徴的だ。

伊藤市長は、3期目に入っている自らの市政運営の段階と足跡を、「守破離」で表現する。

「職員の意識改革など足元を固めて箱モノを作らなかった1期目は《守》。それまでのまちづくりの基盤だったベッドタウンから、ライフタウンへの転換を試みた2期目は《破》。とすれば、まちの顔であるJR春日井駅や市民の健康を支える総合保健医療センターが完成し、懸案だった高蔵寺リ・ニュータウン計画を徹底した市民協働で策定した現段階は、新たなステージに向かう《離》にしていかなければいけません」

都市化と自然のバランスが取れ、交通至便、わがまちの暮らしやすさへの市民の好感度も非常に高い春日井市の新たなステージが、さらにどのような形に結実するのか。今後の推移を興味深く、注目していきたい。

（取材・文＝遠藤 隆／取材日 平成28年12月8日）

子育て世代向け商業施設・ままま勝川（勝川大弘法通り商店街）